奈良女子大学

全国に2校しかない国立女子大学の一つ「奈良女子大学」。古都のキャンパスでは、男女の役割の違いを考えながら共生を強め、女性の社会的存在を高めるという新たな動きが始まっていました。

学長に聞く
今岡 春樹（いまおか はるき） 学長

東京工業大学の工学部で、ファジー理論を研究していた今岡学長。その後入職した通産省の繊維関係の研究所で、コンピュータで服を作るプログラムの開発に取り組みました。そこで奈良女子大学の被服の先生と出会い、交流を重ねるうちにごく自然に移籍したとか。実学中心の生活環境学部長を経て学長へ。女性の視点、生活に役立つ学問の大切さを説く口調は情熱に溢れていました。

一貫して女性の高等教育に関わってきた歩み

――落ち着いたキャンパスからは、歴史の重みがひしひしと伝わります。奈良女子大学が女性の高等教育に果たしてきた役割についてご紹介ください。

本学は1908（明治41）年に開設された奈良女子高等師範学校を母体として、第二次大戦後の学制改革によって国立奈良女子大学となり、2004年に国立大学法人化して今日に至っています。今年で開校から106年になります。

開校当時、高等学校から帝国大学へと進学するのは男子だけで、女子の進学は禁じられてはいなかったとはいえ、帝国大学進学への道は事実上閉ざされていました。当時の女性にとっての高等教育機関は高等女学校でしたが、奈良女子高等師範学校の役割は、その高等女学校の教員を養成することでした。

1890（明治23）年に開校した東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）に次いで、第二女子高等師範学校を関西のどこに置くかの議案について、1907（同40）年の帝国議会において投票がなされました。結果は、京都131票、奈良131票と同数だったそうです。結局、当時の議長の「奈良じゃ」という一言で奈良に決まったと聞いています。

戦後、高等師範学校から国立大学への昇格についても、同窓会の力を借りて東京の文部省やGHQに請願を繰り返し、ようやくお茶の水女子大学と奈良女子大学という2つの国立女子大学が認められたという経緯があります。先人の苦労・努力を次代に繋げるのが学長の役割だと感じています。

国立大学になった後、1980（昭和55）年に博士課程を持った大学院を設置しました。それまでも修士課程まではありましたが、本学の学部を卒業して大学院でドクターになれるという、長年の夢がようやく叶いました。

正門（左）および旧本館（上、現在は記念館）は国の重要文化財に指定されています。

――女性の社会進出が進み、男女の権利に差がなくなっている今日、女子大学の存在理由は何なのでしょうか。

なぜ今、女子大学なのか。この問題は何十年に一回は必ず出てくる話です。国立の女子大学は女性しか勉強できない。これは憲法違反じゃないか、逆差別じゃないかというものです。しかし、最近の多様化の流れの中で、東京と奈良を合わせて1学年で1000人程度の規模であるなら、この程度の多様性があってもいいのでは、という議論もあります。

日本では高度成長が始まったころから女性も国立大学へ行くようになりましたが、関西では京都大学に合格しても、そこでマイノリティであるよりは、奈良女子大学でリーダーシップをとりながら学ぶことに将来の可能性を感じていた人が多くいました。ところが、偏差値で志望校を振り分ける時代になって、入学後の可能性追求よりも、合格の成否を最優先した大学選びが一般化していきました。

大学進学率が5割を超え、大学の使命が徐々に変化しています。昔の学生は自主的に学びましたが、今は勉強の仕方を教える、学生を一人前の人間にするという教育をしなければなりません。昨今、大学生の授業への出席率が非常に高いのは、授業を聞くことそのものが勉強することだと思っているからです。

本学でも勉強するということが分かっていない学生が増えつつあると懸念していましたが、私立大学から転勤されてきた教員が、「この分野は面白そうだから、自分でも本を読んで勉強してみよう」という学生のレポートに、「自分で勉強する学生が、日本にまだいた」と感激したという話を聞き、とても複雑な思いでした。

女子大学のメリットは、女性がのびのびと学べるところです。本学では女子学生がトップに立ち、リーダーを務め、男性の役割を含め全てを女性がこなします。また、部活やサークルの数だけリーダーがいますから、グループ全体のことを考えて行動するリーダーとしての考え方を多くの学生が身に付けることになります。

旧本館内にある「100年ピアノ」は、現存する演奏可能なピアノの中では日本最古と言われています。

食堂はお昼過ぎからカフェとして営業され、オリジナルのパフェなどを提供しています。

女性のプラクティカルな視点を養う学部再編

――今年4月から文学部、理学部、生活環境学部の3学部で改組が行われています。なぜ今なのか、その狙いをお聞かせください。

奈良女子大学には理学部、文学部、生活環境学部の3つの学部があります。今年の4月に学部をまたいだ改組を実施しました。ポイントは生活環境学部の拡充です。今まで生活環境学部は食物・被服・住居など家政学分野が中心で、最も学生数が少ない学部でした。今回の改組では理学部と文学部から一部の専攻を生活環境学部に移しました。

かつては、学問はプラクティカルであればあるほど序列が低く、日常生活で役に立たなければ立たないほど上位という考えがありました。しかし、2006年の教育基本法で、初めて「大学は社会の発展に寄与するものとする」と明記され、実際に役立つ学問に力を注ぐように方向が変わったのです。

今回の改組は、この教育基本法に添った形で、文学部のスポーツ科学コース、理学部の数理情報学講座を生活環境学部に移動しました。その結果、生活環境学部に臨床心理士の受験資格(大学院修了後)に繋がる臨床心理学コースが新設され、理学部から移動した生活情報通信科学コースでは、情報機器と生活環境との融合についての教育・研究が始まっています。生活に必要なプラクティカルな学問を生活環境学部に集めるという改組の狙いは、十分に達成されたと考えています。

4月に実施された生活環境学部の改組

- 食物栄養学科
- 生活健康・衣環境学科
  - 生活健康学専攻
  - 衣環境学専攻
- 住環境学科
- 生活文化学科

→

- 食物栄養学科
- 心身健康学科
  - 生活健康学コース
  - スポーツ健康科学コース
  - 臨床心理学コース
- 情報衣環境学科
  - 衣環境学コース
  - 生活情報通信科学コース
- 住環境学科
- 生活文化学科

――男女同権とはいえ、いまだ実社会では男性上位が続いているともいえます。社会で女性の視点を生かしていくためにはどうすればいいのでしょうか。

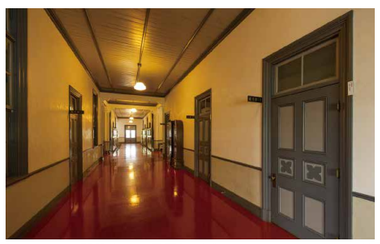
キーワードは「生活環境」です。今、もの作りの世界では、工学系の人たちが「人」を意識した「生活」のためのもの作りを始めています。この分野は、生活の担い手として生活を見続けてきた女性の得意分野です。男性社会は電気、機械、土木、建築など分野ごとの縦割りです。ところが女性は、電気か機械かに関係なく、役立つか否かで判断する、いわば横割りです。

ドイツ語やフランス語などには男性名詞や女性名詞というものがあります。やはり、男女それぞれに得手不得手があることと無関係ではないと思います。男性では気付かないことでも、女性の視点で気付くこともあるでしょう。その部分をトレーニングしていきたいと考えています。

女性と男性の協働は、両者が同じことに取り組むだけでなく、互いの得意分野で補完しあう方法もあると思います。男性と女性の視点が違うからこそ、新しい何かが生まれる可能性があると信じています。

例えば本学の学生はいろいろな形で地域貢献活動に取り組んでいます。東日本大震災後の岩手県で、地元住民と一緒にクッキーの製造販売の事業化に取り組んでいる学生グループや、本学が取り組んでいる限界集落の果樹農業を省力機器の開発で再生するプロジェクトに参加している学生もいます。近畿圏のみならず全国から集まっている学生たちには、こうした活動を故郷に持ち帰り、地方自治体や企業に勤務しながら活かしてほしいと思います。特に若い女性が頑張ってくれると、周りに元気を与えますから。

本学では、学生を教える側の教員のワークライフバランスについてもさまざまな支援を行なっています。例えば子育て中の教員にアシスタントを付けたり、保育所を作って学会出席の間はお子さんを預かるなど、女性の教員が子育てをしながら研究活動を続けやすい環境を整備しています。少子化対策に本腰を入れないと働き手が減少し、日本の国力が低下してしまいますから。



開設当時の雰囲気が残るキャンパスは、NHK連続テレビ小説「ごちそうさん」の撮影に使用されました。

目標に向かい意思疎通が図れる柔軟な組織に

――昨年4月に学長に就任され、いよいよこれから学長としての活動が本格的に始動されることになります。学長としてこれはやり遂げたいという目標をお聞かせください。

2004年に国立大学法人がスタートし、現在は6年サイクルの中期目標期間2期目の途中です。そして2016年から始まる第3期になると、大学間の学生獲得競争がさらに激化します。ゼロサムではなく、マイナスサムゲームです。その中で本学の良さをアピールしていくためには、全学が一丸となって取り組んでいくことが必要不可欠になってきます。

現状では学部は縦割り、事務組織も縦割りです。これを何とか横に繋いで、一つの目標に向かって意思疎通が図れる柔軟な組織にしたいと思っています。

幸いにも本学は、教員が約200名、附属学校教員が約70名、事務職員が約90名とコンパクトな陣容です。小回りが利くことを大学の長所として根付かせたいですね。本学と同等の規模のカリフォルニア工科大学では、30人ものノーベル賞受賞者を輩出しています。規模の大きさではなく組織の柔軟性が大切であることが分かります。皆が同じ方向を向き、変化に柔軟に対応できる体制作りに挑戦したいですね。

キャンパスで聞きました

理学部 化学科 4年
松村 聡子さん

奈良女子大学のコンパクトな規模とアットホームな雰囲気が好きです。石川県の共学の高校からの入学でしたので、女性だけの大学で環境がガラッと変わるのかなと思っていましたが、案外そんなこともなく、自然に馴染めました。4年間、ここで学びましたが、休みの日には京都や大阪にも出かけたりしています。

化学科の専攻なのですが、大学に入ってから3年間の化学の授業は、高校までの化学とは全く違い、どの授業でも根幹的な電子の動きの話に集約されていました。最初はそれが全然理解できなくて、それまで取り組みやすかった化学が、こんなにも難しかったということを大学で実感しました。今では世の中の現象が全て化学的に説明できるということを日々実感していて、それがとても面白いと思っています。現在は与えられたテーマで研究していますが、卒業後はドクターに進んで自分のやりたい研究に取り組み、大学での研究者を目指します。

文学部 言語文化学科 3年
大山 理穂さん

言語に大変興味があり、今はドイツ語学でドイツ語の言語学的な面を勉強し、ラテン語、英語などいろいろな言語の勉強もしています。当初は歴史の勉強をしようと思って大学に入学しました。ところが、初めて受けた第二外国語のドイツ語の授業で、ネイティブの先生が「R」をカッコよく発音していたのを聞いてとても心動かされ、ドイツ語を学ぶことに決めました。

ドイツ語は歯切れがよく言い切る形が多いので、すごく男性的だとは思いますが、スルスルッと流れて読むこともありますし、子音がとても綺麗な言語だと思います。ドイツ語熱が高じ今年の夏から1年間、大学の交換留学制度を利用し、フランスの国境に近いアルザス・ロレーヌ地方のトリアー大学という小さな大学に留学します。

留学から帰ってくると、すぐに就職活動が待っています。私は社会的に弱い立場にいる人を支援するような仕事を希望しており、夢に向けて頑張りたいと思っています。

生活環境学部
生活健康・衣環境学科 2年
林 慧儀さん

マレーシアから奈良女子大学を受験しました。今は生活環境学部で衣環境について勉強しています。私の祖母と母は衣服の仕立てをしていて、その影響もあって、私は子どものころから衣服に興味がありました。衣服の勉強ができる大学を探していて、奈良女子大学を知りました。マレーシアの国内では衣服に関する勉強はあまり人気がなく、専門の勉強ができる大学は1つぐらいしかありません。

父や母は日本への留学に反対していましたが、兄弟で女の子は私だけなので、無理やり説得したら許可してくれました。今は学生寮に入っていますが、この街は静かで勉強するのに良い所だと思います。元々は繊維の素材研究に進みたかったのですが、最近、洗浄について学んでいて、こちらにも興味を持っています。素材研究か洗浄研究か、どちらの研究室に入るかまだ迷っています。今は外国語科目もたくさん取っているので、将来は色々な国で研究を続けたいと思っています。